

幼児の生活時間の違いと保護者の子育て意識

——幼稚園児と保育所児の比較からの検討——

石井 正子・大澤 彩音

A Comparative Survey Regarding Time Use in Daily Life and the Lifestyles of Kindergarteners' and Nursery School Pupils' Families

Masako Ishii and Ayane Osawa

Abstract

Preschool education in Japan has been carried out at two sites: kindergartens that target children whose mothers are full-time housewives, and nursery schools that target children whose parents are both working. This paper reports the results of a survey carried out concerning how the above children and parents use their time and considers the assistance they might need.

The results of the survey (122 cases in kindergarten and 82 cases in nursery schools) showed the following.

Comparing kindergarteners and nursery school pupils, there is no difference in the wake up time, about 7:00 a.m. However, there was about an hour's difference for the average time to go to bed; 20:49 for the kindergarteners and 21:38 for the nursery school pupils. In addition, a larger percentage of nursery school pupils could not wake up unless they were forced to get up.

Comparing fathers' returning time from work, the peak for nursery school pupils' fathers was around 21:00, while that of kindergarteners' fathers was around 22:00 showing about an hour's lag. The fathers of kindergartners tended to get home after their children went to bed.

Regarding sharing of housework and childcare responsibilities in families, mothers mainly had a heavier burden than fathers in both cohorts. In particular, the mothers of kindergarteners tended to assume all responsibility for housework and childcare. The husbands tended not to help with these tasks. The mothers took care of their children after they returned home until the children went to bed. In such cases, mothers need supports from networks of mothers or local communities, and fathers also must be encouraged to participate in childcare. On the other hand, there were many parents of nursery school pupils who wish to fulfill their work responsibilities though they are worried about having insufficient time to engage in caring for their children. In these cases, taking into account their dilemmas, it is important to encourage them to build a solid parent-child relationship during early childhood, and to suggest concrete methods for enhancing the quality of the limited time they spend with their children.

Key words: *infant* (幼児), *time use* (生活時間), *kindergarten* (幼稚園), *nursery school* (保育所), *parents* (保護者), *consciousness of child rearing* (子育て意識)

問題と目的

我が国では、1990年の「1.57ショック」を契機に、出生率の低下を食い止めるための様々な施策が打ち出されてきた。1994年に策定された「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（エンゼルプラン）は、国が示した最初の少子化対策であり、この中で今後10年間に取り組むべき基本的方向と重点施策が定められた。エンゼルプランの中で、少子化の背景要因の筆頭に挙げられたのが「女性の職場進出と子育てと仕事の両立の難しさ」並びに「育児の心理的、肉体的負担」である。

女性の「子育てと仕事の両立」を支援するために取られた様々な施策は、子育て中の家族のライフスタイルと乳幼児期の子どもたちの生活を大きく変貌させている。厚生労働省による「平成23年版働く女性の実情（概要版）」によると、妊娠前に就業していた女性の割合が1980年代後半の61.4%から2000年代後半の70.7%へと9.3ポイント上昇しており、結婚後も働き続ける女性が確実に増加してきていることがわかる。そして、育児休業制度の取得率も1980年代後半の5.7%から2000年代後半の17.1%と、この20年間で大きく上昇した。主要先進国の女性の労働力率を比較したとき、唯一M字カーブが維持されてきた日本であるが、M字の底の値は、徐々に上昇しつつある。

就学前乳幼児の幼稚園・保育所への就園状況について見ると、幼稚園への就園率が1981年の64.4%をピークに徐々に減り、2014年時点での幼稚園就園率は54.2%になっているのに対して、保育所の利用率は急上昇し、1981年時点では26.0%に過ぎなかった5歳児の保育所の利用率が2014年には42.2%まで上昇した。

さらに、乳児期からの入所希望の増加、時間外保育利用の長時間化に見られるように、長期間、長時間を保育所で過ごす子どもたちは増加の一途をたどっている。エンゼルプランにおいて「子育て支援のための施策については、子どもの利益が最大限尊重されるよう配慮すること」とされているが、様々な保育サービスの充実が子どもの利益の尊重につながっているとは言い難い面がある。

小伊藤・岩崎・塚田（2005）は延長保育を実施する保育所が増加し、子どもの帰宅時刻が遅くなることで①夕食時刻、就寝時刻が遅くなる②親子の触れあう時間が少なくなる③夕食前の間食が増え夕食に影響が出る④睡眠不足から寝起きが悪くなり朝食を食べなくなる、といった問題の増加を指摘している。また、佐野・新開（2003）が述べるように、生活リズムの乱れが子どもの生活全体に悪影響を与えていると指摘する意見は従来から多く出されている。畠山（2013）は、こうした生活時間の変化が、昼間の子どもの行動にどのような影響を及ぼしているかを明らかにしようとし、保育所における幼児の生活行動について「昼食」、「昼寝」、「遊び」の側面から2つのグループに型分けし、両者の生活時間の比較を行った。「ちゃんと食べて、よく眠り、よく遊ぶ」Aグループとそれ以外のBグループで比較した結果、両グループ間に明らかな差は見られず、3歳児では登所時刻が早く、降所時刻が遅い事例はむしろAグループに多いと指摘している。

一方で、エンゼルプラン策定以降、矢継ぎ早に出された子育て支援のための政策は、ここに来て新たな展開を迎えている。長年の懸案でありながら実現しなかった幼保一元化が「子ども・子育て新システム」という形で実現しようとしている。そして、新システムの立案にあたっては「すべての子どもの良質な成育環境を保障し、子ども・子育て家庭を社会全体で支援する」ことが目標に掲げられ、ともすると保護者の就労支援と子育てストレスの軽減にばかり目が向きがちであった子育て支援に「すべての子どもの良質な成育環境の保障」という視点が加わった。もっとも、幼保一元化が推進さ

れる大きな理由には、年々園児数が減る幼稚園の施設を活用し、増加する保育所入所希望者に対応し「待機児童問題」の解消につなげたいという意図も当然含まれている。

「すべての子どもの良質な成育環境の保障」にあたっては、「良質な成育環境」の保障のために何が必要なのかを具体的に考えていくことが重要である。保護者のライフスタイルが多様化することによって、子どもの生活時間も大きく影響を受け、子育てに関して保護者が感じている悩みも多様化していることが予想される。現状でも幼稚園に在園している子どもと、保育所を利用している子どもの生活時間は大きく異なり、生活の流れそのものがおそらく質的にも異なる。

本研究は、今後進展することが予想される幼保一元化を視野に入れつつ、幼稚園に在園している子どもと、保育所を利用している子どもの生活時間を比較し、それぞれの保護者が、子育てに関して持つ意識を探ることにより、多様化する子育て家庭のライフスタイルに合わせた支援のあり方について考察することを目的とする。

方 法

1. 質問紙の作成

「子どもの生活環境の実態に関する調査」と題した質問紙を作成した。対象は幼稚園、保育所に子どもを通わせている保護者。調査の趣旨、個人情報保護に関する説明を記載したフェイスシートに続いて、以下の質問項目を配置した。質問項目は全部で 38 項目。質問紙の作成にあたっては小伊藤ほか（2005）の質問紙の一部を作成者の許可を取って使用した。

- 1) 家族構成（構成員、年齢、性別、職業）
- 2) 保護者の勤務状況（保護者の雇用形態、通勤時間、休日、日曜出勤・不規則勤務の有無、帰宅時刻）
- 3) 送迎の状況（通園にかかる時間、送迎手段、迎えの時刻、帰宅時刻、延長保育利用の有無）
- 4) 保護者の平均睡眠時間
- 5) 園選択の理由
- 6) 迎えの時刻までに仕事が終わらなかったときにとる方法（迎え後の残業の有無、二重保育利用の有無、送迎依頼の有無）
- 7) 子どもの保育と仕事との関係
- 8) 家事・育児について（家事全般、育児全般、送り・迎えの担当者ほか）
- 9) 祖父母の支援について（祖父母の有無と居住地、家事・育児援助の有無）
- 10) 子育ての悩みや工夫（自由記述欄設定）

2. 調査対象

調査対象は幼稚園 1 園、保育所 4 か所である。各園への質問紙の配付数と回収率は表 1 の通り。

A 幼稚園は東京都郊外の住宅地に位置する中規模幼稚園。B～D 保育所はいずれも都心部の、地下鉄駅から徒歩圏内の住宅地にあり、E 保育所は東京都郊外の市街地に位置する。B 保育所は東京都認証保育所、C、D、E 保育所はいずれも認可保育所である。

表 1 調査対象家庭数と回収率

園の分類	配付	回収	回収率
A 幼稚園	200	122	61%
B 保育所	80	15	19%
C 保育所	70	20	29%
D 保育所	125	45	36%
E 保育所	150	39	26%
保育所計	425	119	28%

保育所利用児の年齢分布に関しては、3歳未満児のみがいる家庭からの回答が37あり、3歳以上の利用児がいる家庭からの回答が82であった。本研究において、幼稚園在園児との比較を行う際には、3歳以上の利用児がいる82家庭のデータのみを分析の対象とした。

3. 調査時期及び調査方法

調査時期: 2013年3月

調査方法: 各園に在園児数に予備を加えた数の質問紙を持参し配付を依頼した。園を通して保護者に質問紙を配付し、回答後、配付封筒に入れてのり付けし、用意した回収袋に直接入れてもらう手順で回収を行った。

結果と考察

1. 子どもの生活時間の違い

幼稚園在園児（以下、幼稚園児とする）、保育所利用児（以下、保育所児とする）、それぞれの起床、家を出る、降園（所）、帰宅、夕食、就寝の時刻の平均をまとめたものが表2である。起床時刻に大きな差はないが、帰宅、夕食、就寝の時刻には差がある。

両者の生活時間を比較すると、当然のことながら、幼稚園、保育所にいる時間が大きく違うことで家庭での生活時間にも違いが出てくる。起床時刻がほぼ同じでも、家を出る時刻は、保育所児の方が30分以上早いので、朝食や登所の仕度に割ける時間が短くなる。

十分に時間が取れない中で、朝食をどのようにしているかが気になるところである。そこで、「質問20 子どもの朝食はどのようにしていますか」の回答を比較すると、両者ともに、「回答1 毎朝きちんと食べさせる」が90%以上であり、忙しい朝の状況の中でも、保護者が子どもに朝食を食べさせることを重視していることがわかる。保育所児における「回答4 その他」の中には、「食べさせながら出かける」、「車の中でパンやおにぎりを食べさせる」といったものが含まれている。

次に、帰宅から就寝までの生活時間に目を向けると、幼稚園児の場合は、帰宅から就寝まで平均6時間程度の時間があり、ゆとりを持って行動できる反面、この間の過ごし方については母親一人が担っている場合が多いことになる。保育所児は、帰宅から就寝までの時間が3時間程度で、この間に夕食の支度から、食事、お風呂、寝かしつけまでを行っている。

平均夕食時刻を比較すると、両者の間には47分の差がある。幼稚園児の多くが18:00～19:00の間には夕食を済ませるのに対して、保育所児は18:30～19:30に夕食をとる場合が多く10%程度が20:00以降に夕食を食べるという回答であった。「質問19 夕食の支度にかかる時間はどのくらいですか」の回答結果は、幼稚園児保護者の平均支度時間が60分であるのに対して、保育所児保護者の平均支度時間は30分である。「質問23 夕食ができるまでお子様は待てますか」という質問に対して、「間食を食べさせる」と答えた割合は幼稚園児57%、保育所児58%と差がない。しかし、帰宅から夕食までの時間の長さを考えると夕食の直前にもかかわらず子どもの空腹状態を見るに見かねて間食を与えざるを得ない保護者の葛藤がうかがえる。

子どもの就寝時刻の分布をグラフにしたものが図1である。幼稚園児の就寝時刻のピークは21:00

表2 各行動の平均時刻

	幼稚園	保育所
起床	7:02	6:58
家を出る	8:39	8:04
降園（所）	14:18	18:07
帰宅	14:47	18:39
夕食	18:17	19:04
就寝	20:49	21:38

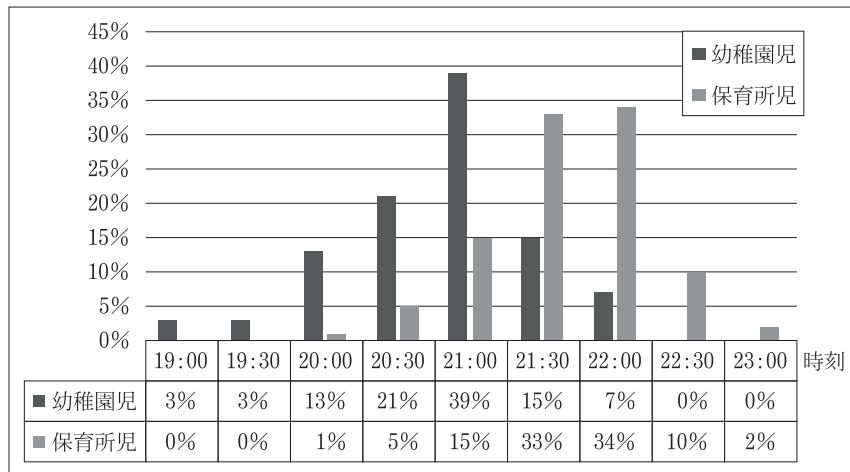


図1 子どもの就寝時刻分布 幼保の比較

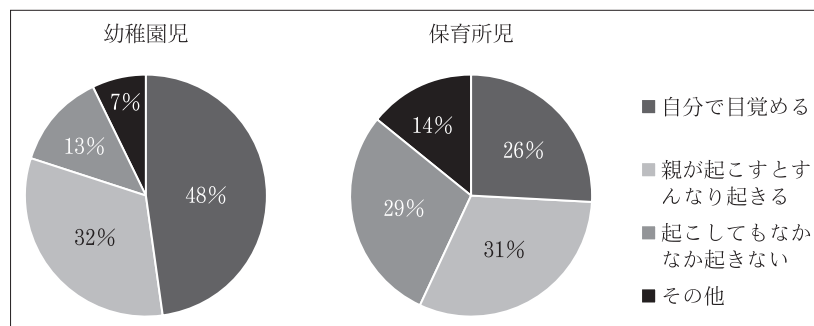


図2 朝の目覚めの様子

であるが、保育所児の場合は21:30～22:00で23:00以降という例もある。起床時刻は両者に大きな違いはないので、この就寝時刻の差は、睡眠時間の差となっている。幼稚園児の平均睡眠時間は、10時間13分であるのに対して、保育所児の平均睡眠時間は、9時間20分となっている。この睡眠時間の差が、目覚めのときの子どもの様子にはっきりと表れている。

「質問28 お子様の朝の目覚めの様子はいかがですか」に対して、比較した結果を図2に示す。

「自分で目覚める」を選択したのは幼稚園児が48%なのに対して、保育所児は26%にとどまる。反対に「起こしてもなかなか起きない」を選択した割合は、幼稚園児13%に対して、保育所児29%で、保育所児は幼稚園児に比べ高い割合で朝起こしてもなかなか起きられない状況にあることがわかる。個人差はあるものの、子どもは本来、十分に睡眠をとれば起こされなくても自分から目が覚めることが多い。しかし、多くの保育所児には起こされないと起きられない状況があり、不足した睡眠時間については、昼寝等で補っていく必要があると思われる。保育所児の昼寝については、その必要性に関して多様な意見があり、これまで一律に実施していた昼寝をやめる動きもあるが、個々の生活時間の実態を考えながら慎重に対応していく必要がある。

2. 保護者の就業状況と家事・育児の分担

保護者の就業状況と家事・育児の分担状況について、幼稚園児と保育所児それぞれの結果を見る。

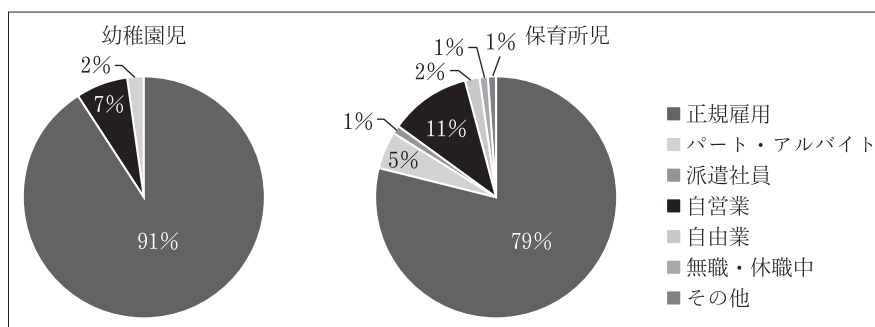


図3 父親の就業状況

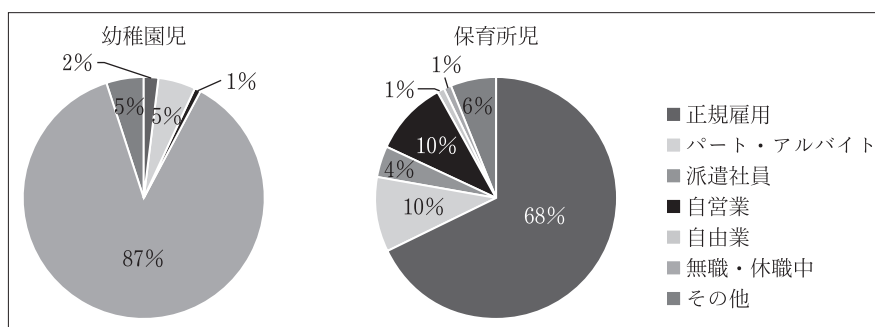


図4 母親の就業状況

1) 保護者の就業状況

幼稚園児，保育所児それぞれの父親の就業状況を図3に，母親の就業状況を図4に示す。幼稚園児の父親の91%が「正規雇用」，7%が「自営業」，2%が「自由業」であるのに対して，保育所児の父親の場合は，79%が「正規雇用」，11%が「自営業」，2%が「自由業」，残り8%はそれ以外の就業状況であった。母親の就業状況は幼稚園児の母親は87%が「無職・休職中」であり，2%は「正規雇用」，5%が「パート・アルバイト」，6%がそれ以外であった。保育所児の母親は68%が「正規雇用」，10%が「パート・アルバイト」，4%が「派遣社員」，10%が「自営業」，1%が「自由業」，7%がそれ以外であった。

幼稚園児の保護者のほとんどが，正規雇用の父親と専業主婦という組み合わせであるのに対して，保育所児の場合は，保護者の就業状況に幅があり，父親と母親の就業状況の組み合わせにも様々なパターンが考えられることがわかった。

2) 帰宅時刻

幼稚園児，保育所児それぞれの父親の平均的な帰宅時刻を図5に，保育所児の母親の帰宅時刻を図6に示す。保育所児の母親の帰宅時刻は18:00がピークで，17:00～19:00に集中している。保育所児の父親の帰宅時刻は21:00がピークであり，母親に比べて3時間遅い。さらに，幼稚園児の父親の帰宅時刻は22:00がピークとなっており，帰宅時刻は子どもの平均的な就寝時刻よりも遅いという結果であった。

幼稚園児，保育所児いずれも，降園（所）後の子どもの世話については母親が一人で担っている場合が多く，とりわけ幼稚園児の場合は，平日，降園後から寝かしつけるまで父親が子育てに関与しない状態が一般的になっていると言える。

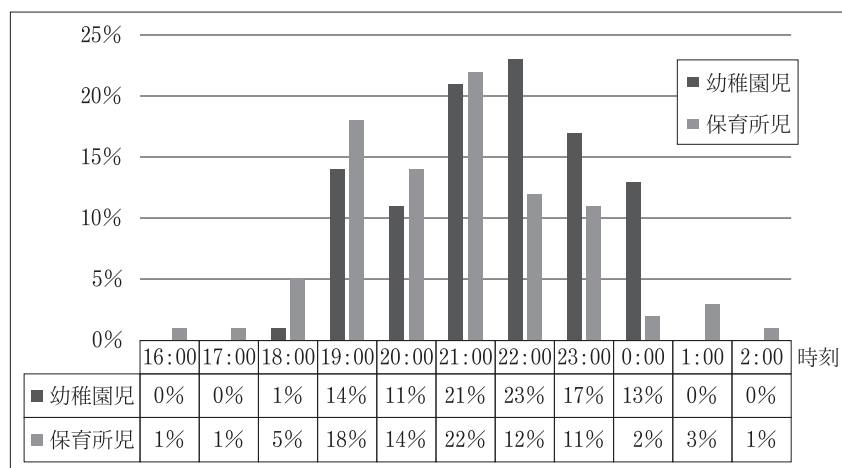


図5 父親の平均的な帰宅時刻

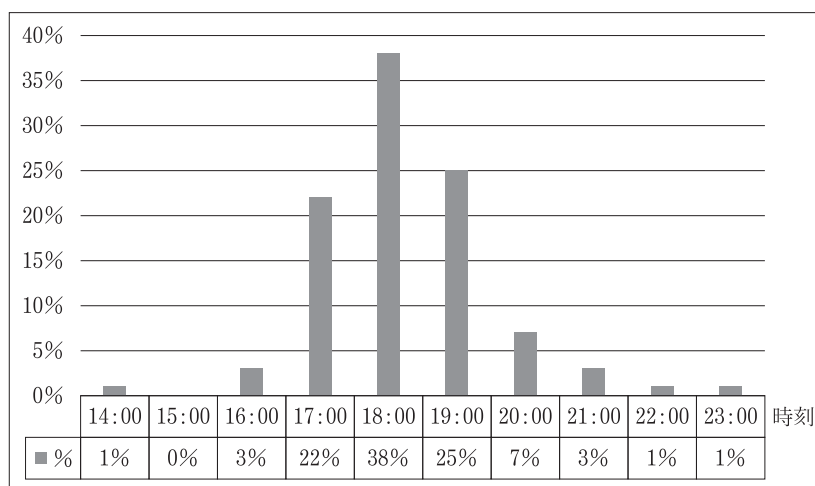


図6 保育所児の母親の帰宅時刻

3) 家事・育児の分担

図7～図11はそれぞれ、幼稚園児・保育所児保護者の家事、夕食の支度、育児、幼稚園・保育所への送り・迎への分担状況である（質問16～質問18）。

家事については、幼稚園児の家庭は68%が「ほとんど母」、29%が「主に母、父も少し参加」であり、それ以外は3%にすぎない。保育所児の家庭は30%が「ほとんど母」、39%が「主に母、父も少し参加」、23%が「同程度に分担」となっており、「主に父、母も少し参加」という家庭も6%ある。夕食の支度について見ると、幼稚園児の家庭は100%「母」で、保育所児の家庭の場合は、87%が「主に母」、3%が「主に父」、2%が「同程度」、5%が「祖父母」という結果だった。育児については、幼稚園児の家庭は41%が「ほとんど母」、55%が「主に母、父も少し参加」、であり、それ以外は4%。保育所児の場合は16%が「ほとんど母」、46%が「主に母、父も少し参加」、30%が「ほぼ同程度に分担」となっており、「主に父、母も少し参加」という家庭も6%ある。

園、所への送迎は、幼稚園児家庭の場合、送りで2%「主に父」があったが、迎えは100%「母」、保育所児家庭の場合、送りは53%が「主に母」、30%が「主に父」、14%が「同程度」、3%が「祖父母」で、迎えは、83%が「主に母」、3%が「主に父」、5%が「同程度」、同じく3%が「祖父母」、

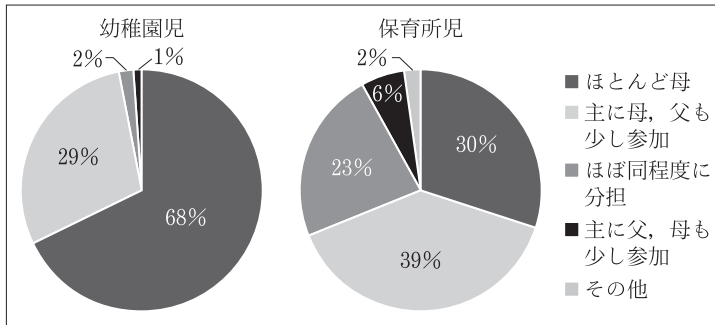


図7 家事分担の状況 幼保の比較

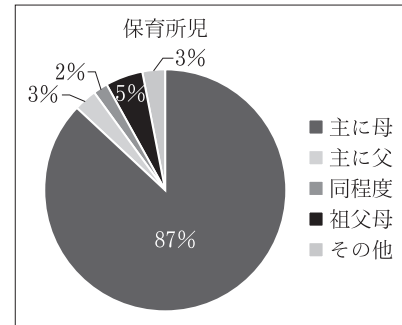


図8 保育所児家庭における夕食の支度分担状況

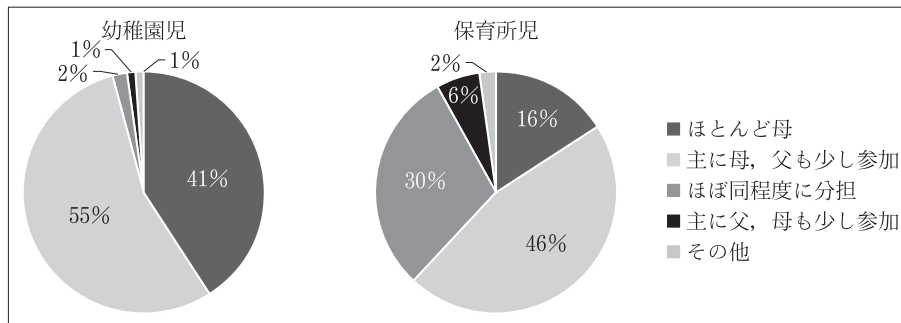


図9 育児の分担状況

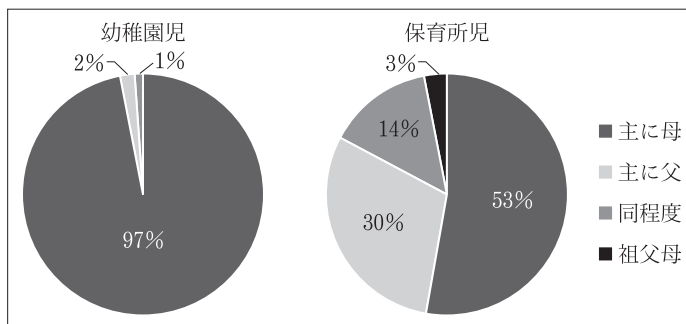


図10 幼稚園・保育所への送り担当者

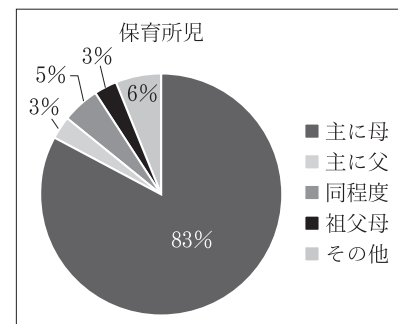


図11 保育所への迎え担当者

6%が「その他」（ベビーシッター等）という結果であった。

幼稚園児の保護者の場合、家事は主婦の役割という意識で全面的に担当している、あるいは父親が分担しなくても家事全般を母親が担える状況にあることが多い。育児に関しても、やや父親の参加場面は増えるものの、家事と同様の理由で実質的には母親がほとんど一人で担っている。それに比べると、保育所児の保護者の場合は、父親が家事や育児に参加する割合は高く、「ほぼ同程度に分担」という家庭が3割程度見られる。しかし、夕食の支度をしているのは87%が「主に母」である。つまり、子育てにおいて最も重要な要素である食事に関して主導権を握っているのは、幼稚園児家庭、保育所児家庭どちらにおいても、母親であると言える。

以上の結果から、家庭生活の中での家事や育児は、幼稚園児家庭でも保育所児家庭でも、主として母親が負担しているが、父親の分担状況は、幼稚園児家庭と保育所児家庭ではかなり違うことがわかった。

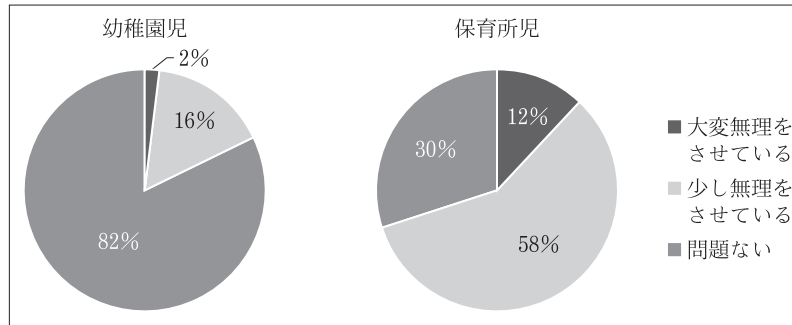


図 12 子どもの生活時間に関する保護者の意識

3. 保護者の子育て意識

次に、現在の子どもの生活時間を保護者がどのように考えているかについて、幼稚園児と保育所児の比較を行った。「質問 30 現在の子どもの生活リズム等、家庭生活についてどのように感じてもらえますか」に対する回答を図 12 に示す。

幼稚園児の保護者の場合、82% が「特に大きな問題はないので今のままでよい」、16% が「少し無理をさせているかもしれないが、改善の努力もしながら基本的に今のままでよい」を選択しており、ほとんどが現状に肯定的である。それに対して、保育所児の保護者の場合は、「少し無理をさせているかもしれないが…今のままでよい」が最も多く 58%、「特に大きな問題はないので今のままでよい」が 30%、そして、「大変無理をさせているので何とか改善したい」が 12% となっている。保育所児の場合も、幼稚園児に比べれば少し無理をさせていると感じている割合が高いものの、おおむね現状に肯定的であった。

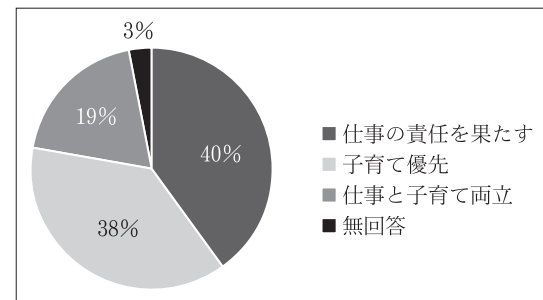


図 13 保育所児保護者の仕事と子育てに関する意識

また、保育と仕事の関係について、保育所児の保護者がどのように考えているかをたずねた「質問 15 子どもの保育と仕事との関係についてどのようにお考えですか」に対する回答を図 13 に示す。「なるべく早く迎えに行くようにしているが、場合によっては延長保育を利用してでも仕事の責任を果たすようにしている」の割合が 40%、「今は子育てを優先し、仕事は最低限で切り上げて定時に迎えに行けるように努力している」の割合が 38% で拮抗しており、「保育時間いっぱいまで子どもを預けてできる限り仕事をこなし、仕事と子育てを両立させたい」との割合が 19% となっている。

保育所児の保護者は、幼稚園児の保護者に比べて「少し子どもに無理をさせているかもしれない…」という意識を持っている割合は高いが、その状況を改善したいとしている割合は高くない。むしろ、「仕事の責任を果たすようにしている」、「保育時間いっぱいまで子どもを預けてできる限り仕事をこなし」といったあたりに、保育時間を気にしながら仕事をせざるを得ない状況へのジレンマがうかがえる。

総合考察と今後の課題

幼稚園児と保育所児の生活時間を比較したところ、帰宅から就寝までの生活状況に大きな違いがあることがわかった。

幼稚園児の場合は、帰宅から就寝までの間に平均6時間程度の時間があり、子どもは比較的ゆとりを持って就寝までの時間を過ごせる。しかし、多くの場合父親は子どもの就寝後に帰宅するので、夕食を家族そろってとるのはおそらく休日に限られ、平日は多くの時間を母子のみで過ごさなければならない。地域の人との関係が希薄になっている昨今の状況において、子どもの通う幼稚園を通して作られる母親同士の人間関係は、家庭外の世界に開かれた数少ない窓口であり、同世代の仲間とつながる唯一の手段ともなっている。

幼稚園児の保護者への支援を考えるにあたっては、母子だけで過ごす時間の重圧と孤独、母親同士の人間関係の中で起こりがちなトラブル、社会とのつながりへの渴望等を理解することが必要である。その上で、降園後の子どもとの時間の過ごし方、家庭での子どもへの対応、子育ての仲間作りといった視点で、母親の心の負担を軽くし、また、不足しがちな父親の家庭生活や子育てへの関与を高めて行くような支援を考えていくことが課題となるだろう。

一方で、保育所児の場合は、帰宅から就寝までの間に3時間しかなく、ゆとりを持って子どもに関わるのは難しい。しかし、そのような状況の中でも保護者はできる限り子どもに朝食をきちんととらせ、父親と母親が協力して仕事と子育ての両立を図ろうとしている家庭が多い。

保育所児の保護者への支援を考えるにあたっては、しっかりと子どもを育てたい気持ちを持ちながら、職場での責任も果たさなければならないという保護者のジレンマを受け止めることが必要である。それを踏まえて、かけがえのない乳幼児期にしっかりと親子の関係を築くことの大切さと、一緒に過ごす時間が少ない分だけ、その時間を豊かなものにするための具体的な方法を伝えることが求められる。

以上見てきたように、幼稚園児、保育所児それぞれの生活時間や保護者の生活状況には、大きな違いがある。今後、「こども園」のような幼保一体型の施設において「すべての子どもの良質な成育環境を保障し、子ども・子育て家庭を社会全体で支援する」とするならば、それぞれの家庭の生活時間や生活状況、抱える問題に合わせた、きめ細やかな個別の支援プログラムを考えていくことが必要になると思われる。

最後に、今回の調査の問題点と今後の課題について触れておきたい。調査結果は、先行研究から予想されたような長時間保育によって生活時間や生活習慣に大きな乱れがあるというようなものではなく、幼稚園児と保育所児とでは生活時間や生活状況の違いはあっても、それぞれの保護者が子どものことを考え、保育所児の保護者も何とか子育てと仕事の両立を図ろうと工夫をしているというものであった。この結果の要因としていくつかの理由が考えられる。

一つは、保育所における質問紙の回収率の低さである。今回、保育所における質問紙の回収率は28%にとどまっており、忙しい中、調査に協力してくださった家庭の保護者はどちらかといえば子育てに積極的に取り組む姿勢を持っていたのかもしれない。今一つは、調査対象とした幼稚園や保育所の立地条件である。特に今回調査対象とした保育所は都心の地下鉄駅の近くであるため、通勤時間が1時間以内の保護者が多い。しかし、これが都心を離れ通勤時間が長くなる地域であれば、生活時間は一層ゆとりのないものになっている可能性がある。今後は、以上のような点を踏まえて様々な子育て家庭の状況を捉える方法を検討する必要がある。

今後の課題として、本研究においては、調査結果のうち主として時間データと選択肢の選択結果を

もとに幼稚園児と保育所児の比較を行ったが、分析が不十分なところもあり、さらに詳細な検討を行っていく必要がある。また、自由記述欄でも、多くの保護者が子育ての悩みや、葛藤を記入しており、その部分についても分析し、幼稚園、保育所、こども園等における乳幼児期の支援を考える上で生かしていきたいと考えている。

引用・参考文献・参考 URL

- 畠山君子（2013）. 集団保育における生活行動の型別にみた幼児の生活時刻について 聖霊女子短期大学紀要 41, 70-80
- 小伊藤亜希子・岩崎くみ子・塚田由佳里（2005）. 帰宅時刻の遅延化が子どもの家庭生活に及ぼす影響—延長保育実施園に通う子どもの調査より— 日本家政学会誌 56(11), 783-790
- 松島のり子（2012）. 戦後日本における幼稚園・保育所の普及と統計にみる地域差—都道府県別経年変化・市町村別設置状況に着目して— 格差センシティブな人間発達科学の創成公募研究成果論文集 20, 161-171
- 佐野勝徳・新開英二（2003）. 『見直そう子育て たて直そう生活リズム—リズムとアクセントのある生活を求めて』 エイデル出版
- 清水民子（2002）. 保育の長時刻化と乳幼児の生活構造の変化—乳幼児の生活時空間の形成における「夜」の過ごし方— 平安女学院大学研究年報 2, 13-23
- 清水民子（2003）. 保育の長時刻化と乳幼児の生活構造の変化（続報）—保育所児の家庭生活調査より— 平安女学院大学研究年報 4, 11-19
- 厚生労働省ホームページ 平成 23 年版 働く女性の実情
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/11.html> 平成 27 年 5 月 18 日最終アクセス
- 総務省統計局ホームページ 日本の統計 22-2 都道府県別幼稚園及び保育所（昭和 55 年～平成 25 年）
<http://www.stat.go.jp/data/nihon/22.htm> 平成 27 年 5 月 18 日最終アクセス

付記

本研究は、大澤彩音 平成 25 年度昭和女子大学卒業論文「幼児の生活時間の違いと保護者支援—幼稚園・保育所に通う子どもの生活時間調査より—」で使用した調査データについて、石井が新たに分析を行い、考察を加えたものである。

謝辞

本研究で用いた質問紙の作成にあたっては、大阪市立大学大学院教授 小伊藤亜紀子氏にご了解をいただき、小伊藤・岩崎・塚田（2005）で使われた質問項目を一部使用しました。質問項目の使用をご快諾いただいた小伊藤先生に御礼申し上げます。

調査にご協力いただいた幼稚園、保育所の保護者の皆様、園長・施設長並びに保育者の皆様に、心より感謝いたします。

（いしい まさこ 初等教育学科）

（おおさわ あやね 平成 25 年度初等教育学科卒業生・鶴ヶ島みどり保育園）